

呉錦堂を語る会通信

NO.25 Apr. 2016

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
 橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」
 Tel. 078-911-1671
 編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員
 発行日 2016.4.1



「同時代」紙誌に見る呉錦堂像 1

今回第25号では、同時代の日本メディアの新聞や雑誌において、呉錦堂がどのように描かれているかを見ていきます。まず、呉錦堂存命中に発行された紙誌から4点、あと、呉錦堂と親交のあった武藤山治の回想録から1点、計5点を取り上げました。
 (編集委員 橋雄三)

頁	掲載紙誌及び記事名	発行年月日	所蔵
1	『大阪朝日新聞』「人物畫傳(64)歸化商人呉錦堂君」	明治40年3月21日	兵庫県立図書館
2	『日本及日本人』第457号 梅阜生著「清商呉錦堂」	明治40年4月15日	神戸大学図書館
3	山内直一編『兵庫縣人物列傳』「縉商 呉錦堂氏」	明治43年10月3日	神戸華僑歴史博物館
	『大阪毎日新聞』「今日の人 呉錦堂」	明治45年7月22日	兵庫県立図書館
4	武藤山治著『私の身の上話』「人の世話」	昭和9年6月17	兵庫県立図書館

● 人物畫傳 (六十四) ▲ 歸化商人呉錦堂君 ▼

呉錦堂といへば誰も知る我が邦で成功した支那人である、彼れは神戸で廣大なる商業を営み、且鐘淵紡績會社の大株主兼取締役として、我が實業界一方の雄である、彼れの財産は今三百万圓と稱されて居るが、二十二年前の彼れを知るものは、不思議の感に打たれざるを得ない、彼れが始めて日本に渡つたは明治十七年、大なる一箇の風呂敷包に、茶碗、燐寸、蝙蝠傘、花簪、凡そ日本人の日用品として、珍しく且つ安價なもの、一切を收め、雨つても照つても、毎日々々長崎市中を行商して居た一個の貧乏商人である、彼れが志を立て郷里寧波を出立した時は、彼れの懐中には僅に千圓の外はなかつた、その千圓も全部自身のものではない、彼れの所持金は僅々二百圓、幸ひに彼れの將來に望を囑した友人が、一人は五百圓、一人は三百圓を投資し、茲に三名の組合は成り立ち、彼は

只最少出資者の身を以てその實行者となつたのである、彼れは最も機敏な商人である、彼れがかく毎日行商する間に、その觀察眼に映じたのは、舶來模造の安價の和製品が、我が國人の間に要求せらるゝことであつた、彼れは直に多くの和製品を仕入れ、神戸に來り、大阪に入り、日夜都鄙を駆け廻つたが、見込みは違はず果して奇利を博した、かくして彼れは奮闘を以て唯一の樂とし、刻苦を以て却て其の心を慰め、以て十年間に最初の資本を百六十倍して、十六萬圓の利益を占めた、こゝに於て彼れは出資の割合に準じて利益を分配し、組合を解いて獨立の身と爲り、神戸に帖(※「怡」の誤りか)生號といふ商會を起し、又燐寸製造組合を起し、益奮闘して遂に今日の地位を致したのである。

彼れは吝嗇漢であるとは、往々聞く所である、這は縦令厘毛の小と雖も、濫りに支出せざる彼れの性行に見て、かくは言ふのであらう、乍併、這は彼れに限らず、凡そ赤手にして産を爲すも

● 人物畫傳 (六十四)
▲ 歸化商人呉錦堂君 ▼

呉錦堂といへば誰も知る我が邦で成功した支那人である、彼れは神戸で廣大なる商業を営み、且鐘淵紡績會社の大株主兼取締役として、我が實業界一方の雄である、彼れの財産は今三百万圓と稱されて居るが、二十二年前の彼れを知るものは、不思議の感に打たれざるを得ない、彼れが始めて日本に渡つたは明治十七年、大なる一箇の風呂敷包に、茶碗、燐寸、蝙蝠傘、花簪、凡そ日本人の日用品として、珍しく且つ安價なもの、一切を收め、雨つても照つても、毎日々々長崎市中を行商して居た一個の貧乏商人である、彼れが志を立て郷里寧波を出立した時は、彼れの懐中には僅に千圓の外はなかつた、その千圓も全部自身のものではない、彼れの所持金は僅々二百圓、幸ひに彼れの將來に望を囑した友人が、一人は五百圓、一人は三百圓を投資し、茲に三名の組合は成り立ち、彼れは最も機敏な商人である、彼れがかく毎日行商する間に、その觀察眼に映じたのは、舶來模造の安價の和製品が、我が國人の間に要求せらるゝことであつた、彼れは直に多くの和製品を仕入れ、神戸に來り、大阪に入り、日夜都鄙を駆け廻つたが、見込みは違はず果して奇利を博した、かくして彼れは奮闘を以て唯一の樂とし、刻苦を以て却て其の心を慰め、以て十年間に最初の資本を百六十倍して、十六萬圓の利益を占めた、こゝに於て彼れは出資の割合に準じて利益を分配し、組合を解いて獨立の身と爲り、神戸に帖(※「怡」の誤りか)生號といふ商會を起し、又燐寸製造組合を起し、益奮闘して遂に今日の地位を致したのである。

彼れは吝嗇漢であるとは、往々聞く所である、這は縦令厘毛の小と雖も、濫りに支出せざる彼れの性行に見て、かくは言ふのであらう、乍併、這は彼れに限らず、凡そ赤手にして産を爲すも

のは、皆此の特色がある、彼が事を決して爲さんとするや、殆ど乾坤一擲の概がある、殊に日露戦争に當つて數萬圓の義捐を爲したに見ても、其の一斑はわかるであらう、彼れは一般の支那人の如く忘恩背義の徒ではない、彼れは、その立身に顧みて、今や日本の歸化人である。

(明治40年3月21日付『大阪朝日新聞』)

「同時代」紙誌に見る吳錦堂像 2

清商吳錦堂

梅阜生

昨年来の株式界に於て鈴久對清商吳錦堂の戦闘は最も人目を惹くに足るものありき。而かも鐘紡株を中心としたる兩者の戦闘は遂に鈴久の勝利に歸せり。吳錦堂乃ち罵つて曰く、投機の秘訣は乳臭兒の知る所にあらず、渠れ今ま倖運に誇るも、其の一敗地に塗みるゝの時、蓋し踵を運らさずして臻らんのみと。鈴久近日の否塞、吳をして竟に先見の名を成さしめたるに似たり。吳は清國浙江省寧波の産、幼にして家貧しく稍々長じて上海に適き、袁子莊に養はる。後ち義生榮、泰昌東の二人と相謀り、雜貨店を日本に開かんとし、本店を上海に置き、支店を大阪に設け、吳は來りて支店の商務を管掌す。業を營むこと七年、贏得十五萬金、茲に於て共同の約を解き、各自單獨に營業せんとし、吳は其の分配として三萬金を懐にするや、乃ち去つて神戸に行き、怡生號を創立し盛んに棉花の輸入を圖り、傍ら各種の事業を營み、商略著々圖に中り



て、勢力大に清商の間に張る。吳の株式に手を著けしは去る二十七八年の交に在り。當時吳は既に棉花賣買に厭氣を生じ、唾手萬々金の快擧を思ひ、私かに紡績業の前途有望なるを觀取し、一個のボロ會社なりとも買取して徐ろに雄飛の地を爲さんと欲し、先ず手を郡山紡績會社に著けて成らず、乃ち轉じて鐘紡株を買占め、三萬株の大株主として遂に同社の重役たるに至れり。昨秋企業株の飛躍に乗じ、吳は其の持株全部を賣放ち、尚ほ進んで其の所有せる以上に賣繋ぎて毫も衰へざりしと傳へられ、鐘紡の基礎爲めに大に動揺を來せしに見るも、彼の機才と手腕との侮るべからざるを知るに足る。今や渠れ怡生號を閉ぢ、

居を舞子海濱に移し、餘生を閑散に托せんと稱するも、渠れの射利眼の未だ盲せざる以上、老骨の一擧手一投足は尚ほ投機界に多少の警戒を要すとせらる。吳、嘗て人に語りて曰く、余は射利の外目的無し、而して余の株に對する方針は、賤く買ひて高く賣る、これのみと。試みに渠れの平生に見る、其の德義を糞土に比し、然諾を茶にして悔みざるのみならず、利に趨るの機敏なる、渠れの同胞清商と雖も舌を捲かざるはなしと云ふ。吳の先に怡生號を起すや、神戸の一清商を欺瞞して其の財産を奪ひ、終に煩悶の極自殺するに至らしめたりと云ふに見るも、渠れの如何に狡獪殘忍なるかを察するに足るべし。

吳錦堂頃日會て財界の利者として、策略縦横の名ありし難波二郎三郎を聘して帷幕の謀將とし、且つ曰く、我れ先きに豎子をして名を爲さしめたるは、渠れの背後に三菱、村井の勁敵ある

を知らざりしが爲めなり、我れ復び彼の狡童と一快戦して、先の敗辱を雪がさるべからずと。而かも鈴久、今や一蹶して起つ能はず、其の軍師として招聘せしと傳へられたる阿部浩は遅かりし由良助の感なきを得ず。吳錦堂亦箸を投じて絶嘆せしや否や。

(明治40年4月15日発行『日本及日本人』第457号)

『人物畫傳』
編輯者 畫傳子
明治四十年七月二十日發行
發行所 有樂社

右の書物(孫文記念館所蔵)の中に左の画像の記事が入っています。内容は、一面に掲載した大阪朝日新聞の記事と全く同じです。



「同時代」紙誌に見る呉錦堂像3及び4

兵庫縣人物列傳

縉商 呉錦堂氏

神戸市下山手通三丁目六五

慕して去る三十七年終に我邦に歸化せり、氏素行端正、商機を見るに敏なり是蓋し巨萬の富を效せし所以なり

麥少彭氏と共に清國出身好一對の紳商として謳はるゝ氏は清國浙江省寧波の人なり明治十八年始めて長崎に渡來し微々たる一商店を開き幾何もなくして大阪に出で同二十三年神戸に居を卜して棉花穀類其他雜貨の貿易に従事し當時は關西實業界の名物男として當地在留清人の牛耳を取るに至り。氏は我邦に駐まると茲に二十五年、夙に我國風を敬慕し去る三十七年終に我邦に歸化せり。我邦に歸化しては在留清人恤兵會の事務に當り、或は軍資に、或は恤兵に又は赤十字社等に巨額の金員を醸出し其功勞顯著なりとして勲章を授與せらる。

(明治43年10月3日発行 編輯者 山内直一 発行所 興信社出版部)



風に我國年、二十五年、夙に我國風を敬慕せり。

今日の人 呉錦堂

海外における日本人の大成功をなすもの稀なるは、小資本と腕一本とを以て小利を私するに甘んずるを以てなり。支那人は然らず、彼等は資本合同の利と、團結の勢力たる所以とを解するを以て、友人互に相出資し、相結んで、或は番頭となり、或は小僧となり、其手腕に應じて實務に服し、其利潤を分配するや株主として對等の位置を主張して互に相侵すことなし。南洋といはず、亞米利加といはず、支那人の大商店は多く此種の經營法に依り、又は會て依りたるものなり。呉錦堂の初めて郷里寧波より來朝するや、彼の懐中千圓の資本あり、内八百圓は友人二名の出資する處、呉錦堂は僅に二百圓を負擔してシカモ此資本運轉の全責任を帶ぶ。彼先づ長崎に來つて大風呂敷を買ひ、燐寸、茶碗、蝙蝠傘の安物を包んで之を負ふて行商し、雨の日も風の

日も會つて怠らず、此行商の間に邦人の嗜好を看取し、大に舶來品の模造を買ひ込んで阪神の間に來り、足に任せて奮闘したる結果、僅々十年の間に資本に對する百十六倍の利益を得、茲に出資に應じて之を友人と分配し、全く獨立して神戸に一商店を創設せり。これ彼が神戸に地盤を構ふの始めなり。神戸における彼の奮闘は實に凄じきものあり、世間或は彼のヤリ口の麥少彭に比してジミなるをいふと雖も、これ彼れが如く赤手空拳を以て富をなしたるの人に深く尤むべき事にあらず。シカも日露戰役當つて數萬金を義捐したるが如き、彼も



今日の人

多し此種の經營法に依り、又は會て依りたるものなり。呉錦堂の初めて郷里寧波より來朝するや、彼の懐中千圓の資本あり、内八百圓は友人二名の出資する處、呉錦堂は僅に二百圓を負擔してシカモ此資本運轉の全責任を帶ぶ。彼先づ長崎に來つて大風呂敷を買ひ、燐寸、茶碗、蝙蝠傘の安物を包んで之を負ふて行商し、雨の日も風の日に會つて怠らず、此行商の間に邦人の嗜好を看取し、大に舶來品の模造を買ひ込んで阪神の間に來り、足に任せて奮闘したる結果、僅々十年の間に資本に對する百十六倍の利益を得、茲に出資に應じて之を友人と分配し、全く獨立して神戸に一商店を創設せり。これ彼が神戸に地盤を構ふの始めなり。神戸における彼の奮闘は實に凄じきものあり、世間或は彼のヤリ口の麥少彭に比してジミなるをいふと雖も、これ彼れが如く赤手空拳を以て富をなしたるの人に深く尤むべき事にあらず。シカも日露戰役當つて數萬金を義捐したるが如き、彼も

武藤山治回想録に見る呉錦堂像

武藤山治は昭和9年3月に死去しましたが、同じ年の6月、長男の武藤金太を発行者・発行所として、『私の身の上話』は出版されました。ここでは、文章と武藤山治の画像は同著より、呉錦堂の画像は昭和63年9月発行の限定自家版『私の身の上話』より転載いたしました。



武藤山治

呉錦堂は、鐘紡の大株主となつて取締役に選挙され、財界知名の一人となりましたが、生ひ立ちには争はれないもので、彼は下層の支那人のやうに人の前でも、平氣で手鼻をかむといふ風で神戸邊りでは別に怪しみもさせぬが、偕て東京へ乗り出して一流の紳士の間に交はるやうになつて、それをやられてはハタで見て居られませぬ、そこで私は急に彼に紳士教育を與へやうと試み、何事も先づ家庭からと考へ呉錦堂に女の家庭教師を雇入れることをすゝめました。彼は家庭教師など家へ入れることは好まぬやうでしたが、私は段々家の將來のためには子供の家庭教育が大事であることを説き、つひに彼を承諾せしめ一人適任者を見出し彼の家に同居して何かと世話をやかせるようにしました。私

の家庭教師を雇入れさせましたのは、實は子供の教育といふよりも呉錦堂本人に磨きをかけて、紳士とまで行かなくとも、せめて人前で手鼻をかまぬ程度にまで仕立てゝやうといふ親切心からでありました。ところがこれが呉錦堂には窮屈でならなかつたようです。始め四五ヶ月の中は何んとか斯とか言つても辛抱して居りましたが、間もなく苦情を言つてとうとう家庭教師を断つて仕舞ひました。然るに呉錦堂の息子の啓藩といふのは早くより母親に別かれ繼母に育てられて居りましたから、短い間でも親身に世話して呉れた家庭教師を慕ひ、家庭教師の方でも啓藩を可愛がり双方共別れ様ともしなかつた様でした。人情といふものは誠に妙なものです。私が此話を申上げますのは、それ以來私

『私の身の上話』
「人の世話」
著者 武藤山治
昭和九年六月十七日發行
發行所 武藤金太

はならぬといふことを悟りましたが、これは、どなたでも御心得になつて置かれて良いことだと思ひましたからです。故井上侯は至つて世話好きの方で、お氣に入つた者のためには其者の家にやつて行き臺所の隅から隅まで彼此と世話をやかれるので、誰も有難迷惑で困るといふ話を以前聞いたことがありましたが、私は呉錦堂を人前へ出た時恥をかゝぬやうにしてやりた

たことがありましたが、私は呉錦堂を人前へ出た時恥をかゝぬやうにしてやりた

領したりして其國を統御する方法を見ますと、全く其國々の習慣とか、仕きたりとか、國民の好むところには、それがどうあつても全く觸れないで、向ふは向ふのやうに、こちらには、こちらの思ふやうに統治して行きますため、英國の統治の下にある國々の人民の間に不平不満が少いやうです。此事は我國の政治家や外交の衝に當る役人がよく心得て居りませぬと、他國民に對し餘り親切に世話をやき過ぎて、却つて先方から忌み嫌はれるやうなことになるかも知言へませぬ。

呉錦堂一個人に對する私の経験話からついで政治外交の問題にまで深入りいたしました。が、次は方面を轉じまして、私が鐘紡在職中外資の輸入をいたしました話を申上げることゝいたします。



呉錦堂氏